

夫婦で守った家業の伝統 ～夫婦で歩んだ25年間～

天羽漁業協同組合
磯貝 由美子

1. 地域の概要

私たちが住む富津市の天羽地区（以下「天羽地区」という）は、千葉県南部の内湾側に位置し、東京湾の交通の要所である浦賀水道に面している。この浦賀水道は、房総半島と三浦半島に挟まれた幅の狭い海域で、外洋から入り込む暖かい海水と東京湾から流れ出る栄養豊富な海水、東京海底谷から上がってくる冷たく栄養豊富な海水の3つが交わることから、潮の流れが速く、魚の餌となるプランクトンが多く発生するため、多種多様な魚が集まり豊かな漁場となっている。この漁場で獲れる魚は脂がのり、身のしまりが良く、古くから江戸前の魚介類の産地として知られている（図1）。

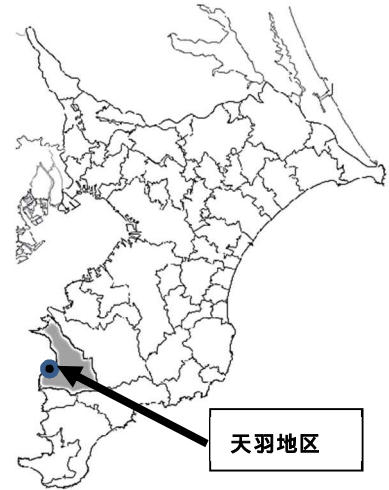


図1 富津市天羽地区の位置

このような恵まれた漁場をもつ天羽地区では、釣りや刺網、定置網等が営まれ、タチウオ、マコガレイ、マダイ、ヒラメ、マアジ等の様々な魚を漁獲しており、その水揚量や金額は、東京湾ではトップクラスの実績を誇る。

2. 漁業の概要

私たちが所属する天羽漁業協同組合（以下「組合」という）は、昭和42年4月1日に同じ市内の金谷地区、萩生地区、竹岡地区、湊地区に跨って、誕生した組合である。

組合員数は、正組合員数108名、准組合員数1名の計109名（平成31年3月末現在）で萩生地区にある本所の他に金谷、竹岡、湊の各地区に支所を有している。

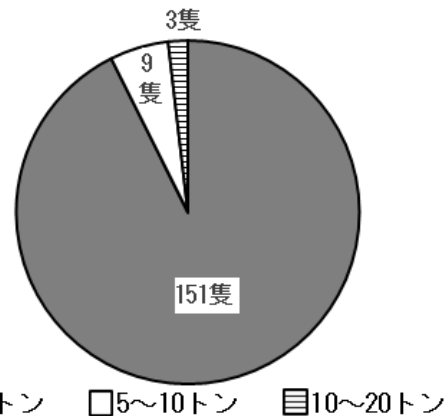


図2 平成30年度天羽漁業協同組合における漁船トン数別隻数

漁業の中心は、5トン未満の小型漁船による操業が中心であり、組合全体の163隻のうち、151隻（92%）を小型漁船が占めている（図2）。タチウオやスズキを対象とする刺網漁業やつり漁業の他、アジやサバを対象とした定置網漁業、小型底曳網漁業、さより船曳網漁業、たこつぼ等の多彩な漁業が営まれている（図3）。



図3 竹岡漁港に水揚げされたタチウオの荷捌き風景

擦れなどが生じないように丁寧に取り扱い、まっすぐな荷姿をしたものは消費地市場でも別格の評価を得ている。

平成30年度の生産量は約1,125トン、金額は約5億6,000万円となっており、その中で私たちが操業している刺網漁業は平成30年度における組合の総生産量の23%（約260トン）、総金額の44%（約2億5千万円）を占める重要な漁業種類である（図4）。

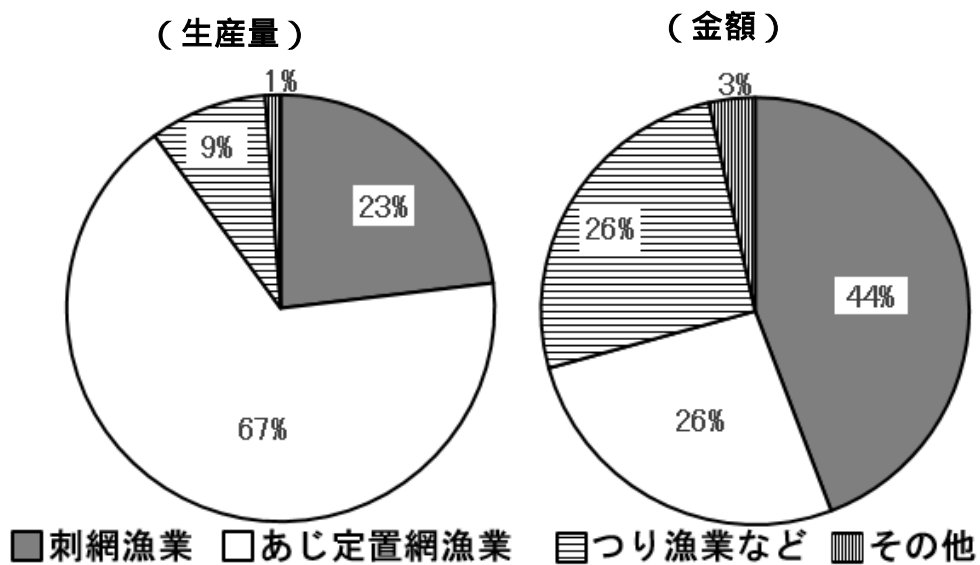


図4 平成30年度 天羽漁業協同組合の総生産量（左）および総生産金額（右）に占める各漁業種類の割合（%）

3. 研究・実践活動取組課題選定の動機

私は現在、生まれ育った天羽地区の竹岡で刺網漁業を操業するひとりの漁師で、夫と2人で「夫婦船」として、操業を行っている（図5）。

家族は母と漁協の組合長を務める夫と、息子、娘があり、ひとりの漁師としてだけでなく、家庭では娘であり、妻であり、母の顔もあり、忙しくも充実した日々を送っている。

私は家業として、漁業を営む家庭に生まれ育った。今は亡き父の孝一（呼称:こいち）は船曳き網（サヨリ2艘曳き）やスズキ刺網を営む腕利きの漁師で、地元では「湾内一の漁師」と呼ばれる、ちょっとした有名人でもあるとともに私と夫の師匠でもある。

また、母は操業を積極的に手伝い、網を作ったり、船での操業も行ってた。

漁業種類は、網漁業で以前は船曳き網（サヨリ2艘曳き）も行ってたが、現在は



図5 現在の夫婦船の様子

刺網漁業に絞り、操業している。江戸前の漁獲を支えてきた東京湾は魚種も豊富であり、tachuo（1～6月）やカマス（6～7月）、スズキ・マダイ・ボラ（8～1月）などを対象に年間を通じて操業を行っている（図6）。

	漁獲対象	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	
刺網漁業	tachuo	←————→												
	カマス						←————→							
	スズキ	←————→							←————→					
	マダイ	←————→							←————→					
	ボラ	←————→							←————→					
										←————→				

図6 刺網漁業における磯貝家の主な対象魚種

私自身は子供の頃から特に漁師になろうと思ったことはなく、実は水産物よりも、肉が好きである。学生時代には自身が「漁師の娘」であることに少し抵抗を感じていた時期もあった。将来的に家業を継ぐことになる可能性を漠然と考えてはいたものの、漁業に就業したいと思ったことはなかった。

そのような私が父の後を継いで漁師になり、地元で漁業を続けている経緯や思いなどを、ひとつの事例として、お話しすることで、既に漁業や浜の仕事に従事されている女性の方や漁業への就業に興味をお持ちである女性の方の他、漁業関係者の男性の方にも何らかの参考や行動のきっかけの一助となればと思う。

4. 研究・実践活動状況及び成果

(1) 夫婦船のはじまり

後に夫婦船の重要なパートナーとなる夫とは、中学校時代に出逢い、同じ高校に進学したことが、交際のきっかけとなった。私たちが進学した先は水産系の高校ではなく、普通科の高校である。当時、夫は野球部員、私はソフトボール同好会員として、同じグラウンドで練習をしていたことが現在の夫婦船に繋がっていった。卒業後、夫は、社会人野球を続ける傍ら、私は会社員として働いていたが、夫が20歳の時に、私との

将来を見据える形で会社員を辞め、父を手伝い、弟子入りする形で婿入りして、家業である漁業に就業してくれた。ちなみに夫は漁師の家の生まれではなかったので、慣れない漁業に従事したことで、人知れず苦勞があったのではないかと思われるが、私に語ることはなかった。

(2) 父の家業を継ぐにあたって

会社員として、10年ほど働いた頃、私は刺網漁船に乗って、父の操業を手伝い始めた。会社に勤めていた間、家業のサヨリ2艘曳きには、夫が乗ってくれており、いつかは自分も乗らなければと思いつつも、なかなか決心出来なかったことも事実である。

その後、15年ほど、父と一緒に刺網漁船に乗り、漁業技術を学び、この頃に父の技を見て覚えたことが後の私を支える土台となっていった。父が体調を崩してからは、父に替わり、夫とともにサヨリ2艘曳きにも乗船するようになり、この頃から「夫婦船」として操業するようになっていった。父が以前から、何かの役に立つからと、私に船舶免許の取得を強く勧めていたこともあり、私が小型船舶免許を取得していたことは幸いであった。

しかし、その後も父の体調は思わしくなく、父の船が地元の船団の中でも、取り分け、水揚高の高い船であったことや夫が地元外の地域から就業したこともあり、周囲から「孝一(父)のところはもう厳しいのではないか？」との声が聞かれることもあった。そういった中、私たち夫婦は家業を続けたら、一生懸命、技術を教えてくれた父も喜んでくれるのではないかと何度も励まし合って乗り切ってきた。

(3) 「女性が漁業に就業するということ」と周囲の協力などについて

周囲の反応

現在、世間の風潮として「男女共同参画」、「女性の活躍」といった視点の報道や発言を耳にする機会が増えているが、家業を継いだ当時は男社会である漁業の世界で女性が船に乗ることに対する周囲の反応は必ずしも温かいものばかりではなかった。

「女性が船に乗って良い訳がない、怪我をするだけだ」という周囲の声も少なくなかった。

そして、実際にひとりで海に出ると、緊張と恐怖で体中が震え上がり、逃げ出したい気持ちになったことも多く、自分から船に乗ると言った手前、降りることが出来ない葛藤もあった。そのような、極限の精神状態の日々を夫婦で過ごす中で、ある知り合いの方が掛けて下さった「周りの悪口が人を強くしてくれるよ」という言葉が今でも、強く印象に残っており、夫婦で大変勇気づけられたことを鮮明に覚えている。また、今になって思い返せば、私たちに手を差し伸べ、助けてくれた方達の方が多く、その温かさには今でも感謝している。

夫からのフォローや夫婦での協力について

ひとりで漁船に乗って漁をするようになってから、3年間程度は無我夢中であった。そして、少しずつ自分で舵を取って行う形での操業に慣れてくるに連れ、段々と海の怖さを実感するようになっていった。当時、操業していたサヨリ2艘曳きでは、私は夫と別の漁船に乗り込み、操業をする必要があり、一人で漁船を操船することに強い恐怖を感じることも少なくなかった。

しかし、当時、一番苦しんだのは、私よりも寧ろ夫であったようである。最近になって、当時の心境を話してくれるようになったが、一人で船を出して、ずぶ濡れで帰ってくる私を見ていて、安全に陸に帰って来てくれるか、とても心配していたそうである。

実際に夫はまだ操業に不慣れであった私を助けながら、一緒に歩いてくれていた。日々操業を行う中で「最初は人の半分の量を獲れば良い」「風が吹いたら、他船が操業していても帰るから」と言った言葉を常に私に掛けてくれていた。また、2隻で操業を行う際は夫と無線で情報をやりとりしながら操業するが、風の向きや海況情報などは夫が見て判断しており、そういった中でも私が安全に操業出来ているか、常に気遣ってくれていた。

父や母からの指導や協力について

夫婦での漁業をやってくることが出来たのは、両親の様々な場面での助けもあったからだ実感している。

父については、尊敬する大きな存在であるのと同時に、私と夫にとっては師匠でもあった。私たちが跡を継いで漁業を続けていってくれることを大変喜び、健在であった頃から私たちの為に残そうと計画的に新しい漁業機器の入れ替え等を進めてくれていたことは、今でもとても感謝している。

母については、今でも操業で家を空けることも多い私を支援してくれている。特に子供たちが幼かった頃は、家事や育児の面での支援がとても有り難いものであった。

昨今、女性の社会進出が謳われ、女性が多くのことを求められる風潮があるように感じているが、何事も過剰な無理は継続出来ないし、得意なことも個々に異なる。周囲の手を借りられる部分は意固地にならずお願いしてきたことで、結果として長く漁業を続けられているのだと思う。

(4) 女性が漁業に就業したことによる浜への影響について

天羽地区の漁獲物は、江戸前の魚介類の産地としてのブランドを確立させてきた。

このことは、女性が漁業に参加してきたことで漁獲物の高品質化にメリットをもたらしているのではないかとの声も聞かれる。

代表的な魚種として知られるタチウオは、千葉ブランド水産物に認定されている「竹岡つりタチウオ」に象徴されるように、良好な鮮度管理や丁寧な漁獲物の扱いが、豊洲や築地などの中央卸売市場の関係者や都内のトップランクの飲食店からの評価に

繋がっている。これらの評価は勿論、地元の漁業関係者全体の努力の結果と言えるが、漁獲物の丁寧な取り扱いや鮮度管理については、漁業の操業段階から多くの女性が参加していることも影響していると思われる。

刺網でタチウオを漁獲するケースを例に挙げると、私たちは、高品質な漁獲物を提供するため、網に掛かる部分を歯の部分だけとなるように網の目合を小さく調整したり、産地市場で好まれる荷姿（タチウオを伸ばした状態）を保つように、いち早く大きいクーラーボックスやトロ箱に入れる方法を採用してきた。また、皆の手本となるように、魚を網から外す際にも、魚体の腹を傷つけないように鰓に手を入れることで、魚体に触れることのないように扱ったり、魚体が網に引っ掛かった際には、網の方を切り、潮が止まっている時間帯に操業することで船の揺れを抑えるなど、漁獲物のスレを減らすよう細やかな注意を払いながら、漁獲物の評価を上げるように努力を続けている。

女性漁業者の中には、こういった丁寧な処置や取り扱いを得意にしている者も多く、夫婦で協力して操業することが良い循環を生み、品質の高い漁獲物を生産し続けることに一役買っているのではないかと思われる。

このような取組みの結果が高い評価に繋がっていると感じている。

なお、こうした手間を掛ける作業は一人で行うことは困難であり、夫婦で力を合わせることでやって来れたことである。

5. 波及効果

(1) 女性の漁業就業に対する周囲への影響

現在まで、夫と二人三脚で歩んできたが、漁業は「毎日、確実に答えが出て、毎日が勝負であった」と感じている。

当時は女性であるというだけで、漁師をやっていくことが大変な時代でもあり、私も夫も若くして漁業に就業したため、周囲からの雑音が聞かれたこともあったが、夫婦で継続して真摯に漁業に取り組む姿勢が周囲にも影響を与え、話しかけてくれる方達も徐々に増えていき、私たち夫婦を浜の仲間として認めてくれる方が増えていった。

「漁師の娘」である私が夫や両親らの支援を得ながら、家業を継いだことが浜に影響を与え、「女性は漁船に乗せていけない」と言われた時代の空気が少しずつ変わって行ったように感じている。私たちがひとつの前例を作れたことで、「漁師の娘が後を継ぐこと」や「女性が漁業を行うこと」について、周囲からの理解を得ることのハードルがまだ十分とは言えないまでも、下がってきたようである。

今ではうちの漁協には夫婦船で操業する仲間が10組以上おり、中には私の学生時代の同級生も含まれている。現在、地元の浜では女性漁業者が網掛け作業をしている光景は珍しいものではなくなった。

(2) 女性が漁業に参加することによるビジネスモデルの変化

小型船漁業では、乗り子を雇用できる程の収益がある経営体は多くないが、私たちの夫婦船の前例が出来たことで地元では、夫婦で協力した操業を行うことで人件費の抑制や収益の向上につなげる新たな操業スタイルが広がっていった。浜の仲間たちからも、お互いに気心が知れたパートナーと操業を行うことで気遣いの負担も減り、操業の安全にも気を配りやすくなったとの声も聞かれており、今後の漁業経営のモデルのひとつになっていく気がしている。

また、女性が漁業に参加する夫婦船としての操業モデルは地域全体としての漁獲物の高品質化に、良い影響をもたらしてきた。私たちを含めた夫婦船が漁獲物の丁寧な処置や取り扱いを行ってきたことで市場から高く評価され、それを見てきた他船にも同様の取組みが広がって行ったことが、地域全体としての漁獲物の高評価に繋がってきたと感じている(図7)。

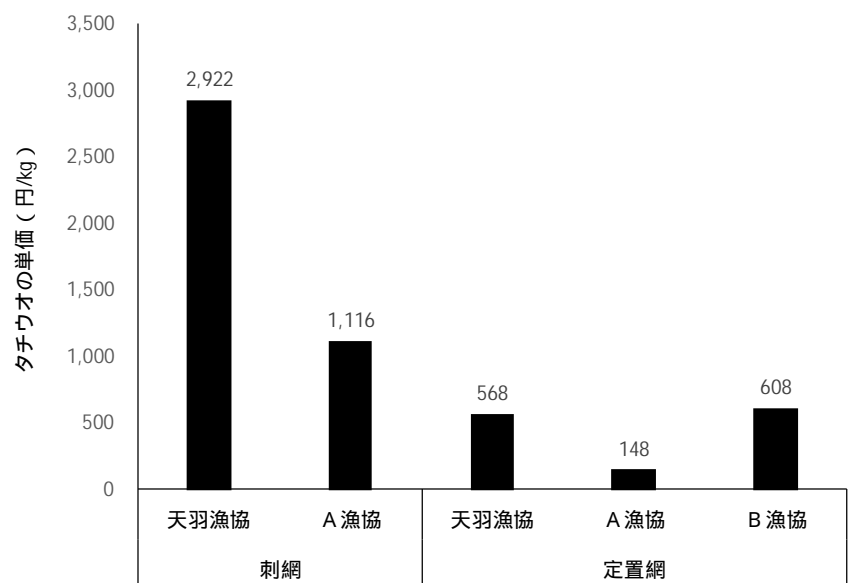


図7 天羽漁業協同組合のタチウオの漁法別平均単価(2016~2018年の3年間の平均)。刺網で漁獲されたタチウオの単価は県内の他漁協と比べても、高値で取引されている。B漁協の2016年のデータは1~7月分が欠損のため、8月~12月分で集計した。

6. 今後の課題や計画と問題点、展望

(1) 今後の漁業への女性の参加について

現在、私たちが操業する東京湾は魚種が豊富であり、他地域の浜と比べれば、豊かな海であると思うが、今年いる魚種が来年も同じ場所にいるとは限らないのではないかと考えている。私と夫はよく今後の漁業をどのようにやっていくのか話し合うが、二人の認識は概ね一致しており、現在の海況の変化や漁業の構造などについて、危機感を共有している。昔に比べて海の生産力は明らかに低下しており、これからは魚を多く獲る時代ではなく、資源管理や産卵期の親魚の保護を行いながら、高付加価値・高品質な漁獲物を生産し、単価を向上させることで収益を確保していく時代であると考えている。

こういった時代の変化に対応していくためには、今後益々、女性の考えや感性を漁業の現場にも取り入れる必要があると思われる。

これまで実際に漁業に従事している地元の女性たちは、男性に比べて単純な力仕事などの面では不利な側面はあるものの、近年は漁業の機械化が進み、水揚げなどの作業を巻取機やクレーンで行うことも多いため、実際に男性と比べて大きなハンディキャップなどを感じる機会は大幅に減少している。

今後の漁業現場では、周囲との円滑なコミュニケーションや漁業関連機器の上手な活用によって女性の漁業就業へのハードルはより低くなっていくのではないかと考えている。

行政には女性が漁業への就業を希望する際に、力仕事を省力化する機器の導入に関する支援などを進めて貰いたいと考えている。

(2) 今後の浜について

私たちには、息子が1人、娘が1人いるが、現時点では、2人とも漁業に就業する様子はないようである。また、義娘(嫁)には負担も大きかった自分自身の道のりを重ね合わせると、以前より女性が漁業に就業することに対するハードルは低くなったものの、同じことを求めるのは、厳しいのかもしれないと思っているのが正直なところである。ただし、私自身は後継者の育成は大変重要であると認識しており、漁業に就業して、技術を覚えたい人がいれば、男女を問わずに教えて行きたいと考えている。そういった中で、私が女性として、漁業の世界に飛び込んだ時に周囲から受けて助かった配慮や経験した苦労などを次世代の育成にも活かして行ければ良いと考えている。

今後、県や市などの行政機関とも連携して、次世代に引き継いでいける環境を目指し、今後も仲間とともに努力を惜しまず頑張っていきたい。